

Chiorin!

<http://www.jeso.jp/>

第4号 (2010年5月)



「グランプリ地球にわくわく」開催

国際地学オリンピック派遣選手を選抜

インドネシアで今年9月に開催される、第4回国際地学オリンピック (IESO) の国内選抜として、「グランプリ地球にわくわく」が開催され、昨年12月に実施された国内一次選抜を通過した24名が参加。茨城県つくば市に点在する地球科学系の研究所を周りながら試験と面接に挑み、4名が国際大会への切符を手にした。

昨年まで、東京大学で実施されてきた国内二次選抜は今年度、「グランプリ地球にわくわく」と題して、茨城県つくば市の筑波研究学園都市を会場に3月24日から3日間の日程で開催された。682名が応募、551名が参加した一次選抜を勝ち抜き、全国から集まった24名の高校生たちは期間中、第一線で活躍する研究者が直接講義する「とっぷ・レクチャー」を聴講したほか、研究学園都市にある産業技術総合研究所、気象研究所、宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、国立環境研究所の各研究機関を見学。地球科学研究の最前線を体感した。

各機関では見学の前に二次選抜となる実技試験に挑んだ。実技試験は各機関の研究者も作題。昨年以上にハイレベルかつ国際

大会で勝ちぬくための出題となった。

実技試験と面接の結果、最優秀賞・日本代表選手として選抜されたのは、大西泰地君 (白陵 [兵庫])、川島崇志君 (静岡県立磐田南)、武内健大君 (聖光学院 [神奈川])、野田和弘君 (広島学院 [広島]) の4名。総合成績がトップだった大西君には、茨城県知事賞も贈られた。また、優秀賞を諏訪敬之君 (灘 [兵庫])、高村悠介君 (埼玉県立川越)、橋本敏明君 (慶

表彰式の記念撮影。後列が最優秀賞、優秀賞受賞者。

應義塾 [神奈川])、丸山純平君 (聖光学院) が受賞、国際大会の補欠選手に選抜された。

このほか、女性で総合成績1位となった渡辺翠さん (桜蔭 [東京]) にはつくば市長賞が贈られた。渡辺さんは国際大会派遣の年齢制限に届かない中学2年生 (当時) にもかかわらず高得点をマークした大快挙が評価された。なお、地質分野の実技試験優秀者には産業技術総合研究所地質調査総合センターからセンター長賞が贈呈された。受賞者は以下の通り。

◆大西泰地、川島崇志、橋本敏明 (以上、所属は前掲)、石井彰吾 (灘)、松本亮 (北海道旭川西) [敬称略]



大規模になった二次選抜

日本開催の布石・魅力アップも

日本は2012年に国際地学オリンピックのホスト国となる。開催都市は、地球科学系の研究所が集中しており、アクセスの便利さや宿泊地確保の観点から、つくば市とする方向で準備中。今回の同市での大規模な二次選抜の実施は、日本委員会や協力する研究機関にとって、受け入れ態勢を整備していく布石と言える。

二次選抜の規模が大きくなったのには、受け入れ態勢の整備以外にも、地学オリンピックの魅力アップにもつなげた

という意図がある。

日本委員会の久田健一郎理事 (筑波大学) は、「地学オリンピックには、優秀な高校生に国際体験の場を与えたいという目的の他、地学オリンピックを通じて若者達の地学に対する興味関心を持ってもらえるようにしたいという希望があった」と語る。しかし、これまでの日本委員会の活動は筆記試験と実技試験の実施に限られておりいわば、「試験をするだけ」であった。「一次試験を突破すると、3日間にわたってじっくりと研究の最前線を見ても

らえる。これは高校生にはなかなかないチャンスであると思う。地学に漠然とした興味を持ってきている子に、さらに夢を与える場になれば」と久田理事は話している。

【今号の紙面】2012年8月に日本大会ほか (2面)、インドネシア大会代表の抱負 (3面)、地学オリンピックに寄せて (4面)

Our Future: Earth & Space

日本大会、2012年8月末開幕が決定

2012年に開催される、国際地学オリンピック日本大会について、日本委員会は3月25日の理事会で会期を8月26日から9月2日までとすることとし、組織委員会を発足させることが決まった。また、本大会のシンボルマーク（右）および、大会のテーマを「Our Future: Earth & Space」（地球から宇宙へ、そして未来へ）とすることもあわせて決まり、テーマのロゴ（下）とともに発表された。会期が決まり組織が整うのと同時に、テーマ、シンボルマークが決まった



大学入試の選考基準にも

AO・推薦で来年度にも

科学オリンピックでは国内選抜の入賞者などに、特別選抜入試やAO入試などの形で一般の入学試験と別の取り扱いをすることが多いが、地学オリンピックでもそのような動きが出てきた。平成23年度の入試から対象にすることを予定しているのは筑波大学、広島大学、早稲田大学の3大学。

一次選抜で出題の統括をしてきた熊谷英憲委員は、「地学オリンピックの出題内容はきわめて高度。実際に過去の入賞者は東大をはじめとする大学に受かっている。実力的には十分であることはこれまでの実績から言える」と太鼓判を押している。

ことで、大会の準備は一気に具体的なものになってきた。

シンボルマークとロゴを作製したのは、共立女子大学の林田廣伸教授。教授は長年、広告代理店の制作局に務め、その後大学で社会のつながりを持った広告を研究している。日本委員会の瀨野洋三理事長は、「林

第6回 国際地学オリンピック International Earth Science Olympiad



田先生に作っていただいたシンボルマークは、地学の多様性が美しいデザインの中にまとめられていて、大変素晴らしい。」と話している。

難しかった今回の選抜試験

地学の面白さも追求

今回の選抜試験は全体的に昨年より厳しいものとなったようだ。受験者の提出したアンケートを分析した久田健一郎理事（筑波大学）によれば、「一次も二次も非常に難しかったとする意見がほとんどであった」という。

こうした問題の出題意図はどこにあるのだろうか。出題を総括した熊谷英憲委員（海洋研究開発機構）によれば、「知識だけを問うのではなく、データを検討するという、実際に地学の研究や実務に携わる人が行っている過程を試験でも体験できるようにしたい」という。この傾向は二次選抜で顕著で、海洋分野で観測データを図にまとめて検討するという問題が出されたほか、気象分野でも将来を予想する、というような問題が出題さ



れた。二次選抜の地質分野、「岩石・鉱物の鑑定」の様子。

れた。

一方、日頃の実践も重視されている。今回の二次選抜では地質分野で「岩石・鉱物の鑑定」が出題されたが、これは実物に触れたり見たりする機会がないと難しいだろう。色々な体験をし、観察結果を分析できるということが、代表に求められていると言えよう。

2011年は イタリアで

参加者募集は9月1日から

2011年の第5回国際地学オリンピックイタリア大会の代表を選抜する国内選抜の一次選抜は今年12月19日（日）に全国の会場で実施される。参加申し込みは9月1日から11月15日まで。詳しい情報はホームページに掲載される。

一次選抜は今年からオールマークシート方式になる予定。成績上位者は来年3月に開催される二次選抜に出場する。二次選抜は今年と同様合宿形式で行われ、研究機関の見学や研究者による「とっぷ・レクチャー」なども予定されている。

インドネシア大会に向けて 代表が語る抱負

二次選抜となった「グランプリ地球にわくわく」で代表に選ばれた高校生。選考の過程でどのようなことを感じたのか、またインドネシア大会に向けた抱負は何かを語ってもらった。

徹底的に鍛えて臨みたい

国際大会の日本代表4名の一人に選ばれたことを大変うれしく思います。部活動や課題で忙しい中での初の参加で、試験対策も十分とは言えず、正直なところ自分が代表に選抜されるとは思ってもいませんでした。

地学の各分野にはかねてから興味があり、高校の授業でも一通りの内容を履修しましたが、二次選抜の試験や全国の選手たちとの交流の中で、現時点での自分の経験不足や知識の狭さ、英語力の弱さを痛感しました。自分にはまだまだ多くの足りない部分がありますが、インドネシアで国際大会が開催される9月までに、それらを徹底的に鍛えていきたいと思います。

最後に、自分を支えて下さっている先生方や友人、全国の仲間、家族、多くの方々への心からの感謝の気持ちと、最後まで絶対に諦めない、必ず勝ちに行くという強い気持ちを持って、9月のインドネシアでの国際大会に臨みたいと思います。よろしくお願い致します。

川島崇志
(静岡県立磐田南高等学校3年)

続けて欲しい「地球にわくわく」

本当に参加できて良かった。これが僕の「グランプリ地球にわくわく」の第一の感想です。

学校に地学の授業はなく、同学校の参加者はもちろん参加者に面識のある方もいない中、期待よりも緊張と不安で迎えたこの「グランプリ地球にわくわく」でしたがそのような不安はすぐなくなりました。ほかの参加者がとても親しみやすく声をかけてくれたのです。24人とい

う少人数で同一宿舎に泊まったの合宿ということでみんなすぐに意気投合し、2日目の夜には一つの部屋で夜を徹して語り合ったり、最終的にはメールアドレスを交換して今でも連絡したりしています。

「グランプリ地球にわくわく」の素晴らしい点は、人との出会いだけに留まりません。各研究所の研究者の方々が発表をしてくださった「とつぶ・レクチャー」、2日目の試験の間の研究所見学では普段は見ることのできない施設を見たり、深い地学の知識を得ることができました。JAXAの無重力訓練を行うプールは特に興味深かったです。

この合宿は国際地学オリンピックの日本代表を選出するためのものでしたが、実際に代表に選ばれた僕としても、以上の点は代表に選ばれることに負けず劣らず価値のあることと思います。来年以降もこの「グランプリ地球にわくわく」が続くことを願って止みません。

最後に国際地学オリンピックへの意気込みですが、まず国際交流や開催地インドネシアの文化、風土を楽しみ、そしてメダルにこだわりたいと思います。自身、未熟な面もありますが精励恪勤努めますので、どうぞ応援よろしくをお願いします。

大西泰地
(白陵高等学校2年)

合宿で多くの刺激が

私は日本地学オリンピックに昨年も参加させていただきましたが、今年は昨年を遥かに越える収穫がありました。

それはやはり今年から二次選抜が合宿形式になったからだと思います。合宿する人数が少ないこともあり、二泊三日の合宿期間中、全国から集まった仲間とより親密に会話を交わすことができました。またその中で多くの刺激を受けたことが一番大きな収穫だったと思います。

そして、もう一つの大きな収穫は実際に地学研究・開発をしている現場を見学することができたことです。自分にとっ

て生の現場はどこか現実的ではなかっただけに、自分の目で直接見る機会を与えていただいたことは、私の人生においてもとても貴重な体験だったと思います。

このような貴重な体験をさせて下さった地学オリンピックの皆様、そして一緒に闘った仲間のためにも国際大会まで日々精進し、全力を尽くしたいと思います。

野田和弘
(広島学院高等学校3年)

3年越しの努力が実った

代表に選ばれたときにまず思ったのは、「やっと努力が実った…」ということでした。第1回から参加し続けてる(そしてその度に毎回二次選抜を突破できなかった)僕にとっては今回が最後の年、だから悔いのない大会にしよう、と最初から心に決めていました。

一番緊張したのは面接への選抜のときでした。自分は前の日の岩石の試験がさっぱりできなかったのもうだめだろうな、とあきらめていたのですが、そう思っている自分の中に、今まで3年間の苦勞をそう簡単にはあきらめきれず、もしかしたら選ばれているかもしれない、と思いたがっている未練がましい自分もいて、とにかく早く発表してほしい、このままだと胸がつぶれそう、という感じでした。表彰式ではまさか呼ばれるなどと思ってもいなかったのも、名前を呼ばれてしばらくしてようやく、自分はまさに今日本代表として選ばれたのだ、と急に実感がわいてきて、つい泣き出しそうになってしまいました。

日本代表として選ばれたことは光栄で、歴代の先輩たちの成果に恥じることはないような成果を向こうで出していきたい、と思います。

武内健大
(聖光学院高等学校3年)

寄稿：地学オリンピックに寄せて

青木正博

セントヘレンズ火山が、大規模な山体崩壊とともに長い眠りから覚めたのは1980年のことだった。ほぼ完全に吹き飛ばされた生態系も、その後の30年で着実に回復し、裾野はふたたび緑に覆われた。観光名所ゆえにビジターセンターが5つも開設され、見学情報が手厚く流布されるようになった。しかし、観光の条件が良くなったにもかかわらず、観光客の数は10年ほど前から減少し、とうとう最大規模のビジターセンターは経営不振で閉鎖されるに至った。道路が整備された結果、遠来の訪問者も直接に展望台に乗り付け、あわただしく予定をこなして立ち去ってしまう。見どころ情報が行き渡った結果、観光客は試行錯誤なしにポイントをクリア出来るのだ。アクセスが悪く、情報も十分ではなかったときの方が、セントヘレンズは人々の関心を惹きつけていた。この顛末は、地学の普及にかける私たちの熱意が、青少年の試行錯誤のチャンスを奪い、皮肉にも好奇心を萎えさせる可能性を示唆する。

地学オリンピックというわかりやすいシンボルのもとに、地学教育の充実が図られるのは好ましい事に違いない。オリ

ンピックであるからには、ルールを決めて速さと正確さを競うことになる。その状況に、整備が行き届いた観光地に出かけ、展望台の解説パネルだけ読んで去って行く人々の姿を重ねて見るのは、心配しすぎだろうか。

地学が血肉となるためには、その楽しさを身体感覚として蓄える必要がある。青少年のためにはフィールドワークや実験・観測を楽しむ機会を増やしたい。観察の楽しさが考える楽しさへと転換してゆく上では、チャレンジ精神に満ちた研究者と直にふれあうことが力になる。地学オリンピック競技と並行して、そのための工夫が試みられることを願う。

(産業技術総合研究所地質標本館名誉館長)



噴火後のセントヘレンズ山 (写真提供は鈴木桂子さん [神戸大・理] 1984年撮影)

Chiorin! リレーエッセイ no. 4

化石マニアの夢

柳家 小ゑん



先日、化石マニアの飲み会に参加した。初めは「歌舞伎座の壁に良いアンモナイトを見つけた」とか、「〇〇ホテルの大理石の床にウミユリがあった」などと言う話がひとしきりあり、やがて一人が最近手に入れた化石を鞆から取り出し自慢し始める。すると他のメンバーからも次々と三葉虫、ベレムナイト等といった化石が披露され話が一挙に盛り上がる。

しまいに「どうだ、コレは！」と〇〇ザウルスの糞化石がドン！と置かれたのだ。それを手に取りながら「いいなあ・・」と連中は酒を呑んで話に熱中している。コレだからマニアは面白い。

揚句の果てに、どういう死に方をしたら自分が化石になれるか、という耳を疑

う様な話に発展した。そこで、私も考えてみた。

化石採集のために一人で山深いカルスト台地を歩いている。その下には未発見の鍾乳洞が有るのだ。ブッシュをかき分けながら進んでいると、誤って穴に足を取られその鍾乳洞に滑落、真逆さまに落ち、石筍に頭をぶつけて即死。そのまま死後硬直が始まる。出来ればギリシャ彫刻のように両手を顔の前に掲げた姿が良い。その頭に石灰水がポターン、ポターン、と落ちて来るのだ。

やがて時は流れ3000年後、その鍾乳洞が発見される。探検隊がライトを手に恐る恐る進んでいくと、暗闇の中に突然人型の鍾乳石が・・。その形は両手を掲げゲートのように「もっと光を！」と叫

んでいるようだ。

これが翌朝の三大新聞の一面に写真入りでドーンと載ってしまう。これって化石マニアの究極の夢じゃないかなあ・・？地学って楽しいですね。

やなぎやこえん。落語家。1953年東京都目黒区生まれ。武蔵工業大学から柳家小さんに入門。1985年真打昇進。天文ファンの噺家として知られ、星空落語が当たり。長年、雑誌「天文ガイド」に連載を持っている。1997年、小惑星6330がKOENと命名される。

特定非営利活動法人地学オリンピック

日本委員会ニューズレター

Chiorin! (no.4)

平成22年5月15日発行

発行人：特定非営利活動法人

地学オリンピック日本委員会広報委員会

編集長：萬年一剛 (広報副委員長・南フロリダ大学)

印刷所：あしがら印刷

〒113-0032

東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル4F

日本地球惑星科学連合事務局気付 (事務局長・瀧上)